

# 居酒屋 ほっこり

秋川滝美 Takimi Akikawa

9

## 目次

いつか来た道 ..... 215

家出騒動 ..... 161

それぞれの居心地 ..... 111

お助け栗きんとん ..... 57

傷を癒すもの ..... 5

傷を癒すもの

鮭のアラ汁

鮭のちゃんちゃん焼き

マグロとゴボウのこぐれ煮

東京下町で居酒屋『ばつたくり』を営む美音は、帰宅しようと外に出たとたん、空気の冷たさに身を震わせた。

十一月も終わりに近づき、夜中はもうかなり冷え込む。そろそろ厚手のコートを出さなければ、と思いつつ美音は引き戸に鍵をかけた。

あたりに人影はなく、通りは静まり返っている。一日の仕事を終えた疲れと、軽い充実感を覚えながら美音は自宅に向けて歩き出す。

商店街で一番遅くまで営業しているのは『ばつたくり』なので、この店の灯りが消えると商店街を照らすのは街灯のみとなる。かつては暖かみのあるオレンジ色の電球だったが、LEDに変えられた今、青白い光が空気の冷たさに拍車をかけているように思えた。

だが、美音がそれよりも残念に思うのは、LED照明の明るさそのものだ。

確かに電球よりもずっと遠くまで灯りが届き、省エネにもなるというのはいいことである。けれ

ど、ただでさえ都会は明るすぎて星が見えないと言われているのに、照明すべてがLEDになつてしまつたら、今まで以上に星を見つけにくくなるのではないか、と心配になるのだ。

よく晴れた夜、星座を探しながら帰るのは、美音の楽しみのひとつだった。今のうちに堪能しておいたほうがいいのかしら……と思いながら、美音は空を見上げる。

——オリオン座があんなところに。今年ももうすぐ終わっちゃうのね……

例年この時期になると、年の瀬までにやらなければならぬことが次々に頭に浮かんで焦燥感に駆られる。毎年のことなのに、どうしてもつと計画的にできないのかしら、と情けなくなるほどだ。とはいっても、おせちの食材は年の瀬にならないと店に並ばないし、あまり早々と大掃除をしてしまうと年明けまでにまた汚れてしまいそう……なんて自分に言い訳をしながら、ふと腕にかけていた鞄を見た。

——なんだか膨らんでいるような気がする。

いつもと違うものでも入れてたつけ？　と、首を傾げた次の瞬間、美音はぎょっとした。

「忘れてた！」

鞄をわざわざ膨らませていたのは、黒い不織布のケースに入れられた映画のDVDだった。

駅前のレンタルショップで借りたもので、期限は今日まで。仕込みを終えたあと、散歩がてら返しに行けばいいと思って持ってきたのだが、今日は思ったよりも仕込みに時間がかかつてしまつた。

そのせいで散歩はショートコースに変更、駅まで行くことができなかつたのだ。

こんなことなら妹の馨に頼めばよかつた、自転車ならすぐだつたのに……と大きなため息が出てしまう。

期限は今日までというものの、件のレンタルショップにおける『今日』の定義は、翌日の開店時刻までだ。開店時刻は朝十時だから、それまでに返却ボックスに入れれば問題ないとはわかつているが、夜のうちに返しに行つたほうが安心。なにより、この時間ならまだレンタルショップは営業中だから、別の作品を借りることもできる。

美音は鞄からスマホを取り出し、馨に帰宅が遅れるというメッセージを送信した。

すぐに馨から、『こんな時間に駅まで行くの?』という返信が来る。続いて、驚いているアザラシのスタンプも。やむなく、再度メッセージを送つて事情を説明すると、ため息をつくアザラシと、『とにかく気をつけて』というメッセージが返ってきた。姉の性格と、レンタルDVDの返却という用向きから考えて、やむを得ないと判断したのだろう。

続いて届いたのは、『自転車が置きっぱなしになつてるから使つて』というありがたい言葉だつた。そこに至つてようやく美音は、馨が今、家にいないことを思い出した。美音より少し早く仕事を終えた馨は、このあと彼氏の哲<sup>わざ</sup>と会うことになつていて、と嬉しそうに出ていった。ぎりぎりバスのある時間だつたから、自転車をおいてバスで駅に向かつたのだろう。

『ぼつたくり』から駅までは、かなりの距離がある。だが、店を閉めたこの時間、バスはもう終わつているため、歩くしかない。正直、けつこう時間がかかるなあと思つていたのだ。自転車なら歩くよりもずっと早いし、安全だ。

『ありがとう! すごく助かる!』というメッセージに、『ごういたしまして。でも本当に気をつけて!』という言葉と困り果てた顔のスタンプが返つてきて、姉妹のやりとりは終了した。

こんな時間に駅まで、しかもひとりで行くのは危ないとわかっている。恋人である要<sup>かなめ</sup>に知られたらとんでもなく叱られるだろう。

だが、明日の朝に回してしまえば、急用が入つて返しに行けなくなる可能性もある。無駄に延滞料を払うのは嫌だつたし、何よりこの時間なら人も少ない。周りを気にせずゆっくりと、次に借りるDVDを選ぶことができるのだ。

そうやって借りてきた古い映画やドラマを観ることは、星座探し同様美音の楽しみのひとつだつた。

無事にDVDを返し終えた美音は、次に借りるものを探そと店の奥に入つていった。

店内は人影もまばらだつたが、やはり人気があるのか、新作コーナーにだけは客がそれなりに見受けられる。

とはいえ新作はレンタル料も高いし、貸し出し中ばかり。それよりも旧作の名画や家族向けのドラマのほうが気楽、ということで、美音が新作を借りることはほとんどなかつた。

例によつて新作コーナーを通り過ぎ、旧作名画のコーナーに入つた美音は咄嗟に足を止めた。そこにいた客に見覚えがあつたからだ。

ずらりと並んだ旧作名画のDVDを手にとつて眺めては戻し、また次を……とやつているのは、つい最近『加藤精肉店』の息子、ユキヒロと結婚したばかりのリカだつた。

ふたりの結婚に先立ち、リカの兄は『加藤精肉店』界隈に聞き合せに現れた。

その際、『ぼつたくり』にも立ち寄り、常連たちから『加藤精肉店』についての話を聞いたのだ。もちろん常連たちは、早々に聞き合せだと察し、縁談に差し障るような話は一切しなかつた。にもかかわらず、リカの兄は家族にあまりいい報告をしなかつたらしく、『加藤精肉店』の店主ヨシノリは、息子の縁談が壊れてしまうのではないかとすいぶん心配していた。

リカの兄にしてみれば、妹は内気だから客商売に向かない、肉屋の跡取りと結婚したら苦労するのではないか、という懸念があつたようだ。それでも本人たちの意志は固く、ふたりがかりでリカの家族を説得し、無事結婚に漕ぎ着けた。

当初、跡取り息子の結婚ということで、さぞや盛大な式を挙げるのではないかと噂されたが、本たちも家族もいわゆる『ジミ婚』志向。大がかりな披露宴はやらずに神前式と家族だけの食事会

に留めた。その後、ヨシノリ一家は揃つて商店街の端から端まで挨拶に回り、住民たちはこぞつてふたりの結婚を祝つたのだった。

結婚後、リカはヨシノリ一家とともに店頭に立つようになり、肉を量つたり包んだりと少しづつ仕事を覚え始めた——それが三ヶ月前のことである。

普段美音は『ぼつたくり』で使う食材を配達してもらつてゐるため、店頭に足を運ぶことはあまらない。

とはいえ、仕込みを終えたあと、献立に物足りなさを感じて急遽一品加える場合がある。予定外の料理だから、食材の用意がなければ買いに行くしかない。そんなこんなで、昼下がり、買い物に行くのだが、昼下がりは客が少ない時間帯とみて、どの店も交代で休憩を取つてゐるらしい。店頭にいるのはせいぜいひとり、時には誰もいなくて、奥に向かつて呼びかけて出てきてもらうこともあつた。『魚辰』しかり、『八百源』しかりである。

そんな中、『加藤精肉店』が無人だつたことはなく、大体の場合、リカがひとりで店番をしてゐた。客が注文した肉のトレイを取り出して、真剣そのものの表情で量る。丁寧に包んで、たどたどしく礼を言う——そんなりカの姿は初々しく、とてもかわいらしい。『加藤精肉店』の看板は字が消えかけているけれど、この看板娘がいれば十分事足りると美音は思つてゐた。

「リカさん？」

「あ……美音さん。こんばんは」

ユキヒロと一緒に暮らしていると思つていたのだが、こんな深夜にひとりでいるところをみると、そうではなかつたのだろうか。

リカは既に、一本や二本ではない数のDVDを手にしているのに、さらに物色中の様子。おそらく彼女の趣味は映画鑑賞なのだろう。いかにも『肉屋の若嫁さんは控えめで大人しい』と噂される彼女に相応しい、ひとりでひつそりと楽しめる趣味だと思う。

リカは検索機で出力してきたりしき用紙と、DVDが並べられている棚を見比べては首を傾げている。データ上はそこにあるはずなのに、見つからなくて困つているようだ。書店やレンタルショップではよくあることだつた。

「見つからないの？ もしよければ、一緒に探しましようか？」

「あ……」

リカは一瞬ためらつたようだが、どうしても観たい作品だつたらしく、手にしていた用紙を美音に示した。それはかなり古いフランス映画だつた。

「ああ、これ……私も観たことがあるわ。でも、ずいぶん前の作品だから、置いているお店が少な

いのよね」

「そうみたいですね」

そんな言葉を交わしつつ、しばらく探した結果、その作品を見つけたのは美音だつた。本来あるべき場所から少し離れた棚に紛れ込んでいたのだ。

「あつた！ リカさん、これじゃない？」

「これです、これです。こんなところに入り込んでたんですね……」

リカは、美音が差し出したDVDを嬉しそうに受け取つた。その時点で、美音も自分が借りる作品を選び終わつていていた。リカの探し物を手伝つている間に、かねてから観たいと思っていたタイトルを見つけたのだ。

本日はこれにて終了、ということで、ふたりは一緒にレジカウンターに向かつた。

深夜だつたせいか、稼働しているレジはひとつしかない。美音はリカに先を譲り、後ろに並んで自分の番が来るのを待つていていた。

間隔をあけて立つていていたわけではないので、店員がレンタル処理をするために並べたDVDのタイトルが自然と目に入つてくる。

リカが借りようとしていたのは、誰もが知つてゐる有名作品ばかり。しかも、そのすべてが『全世界が泣いた！』なんて煽り文句がつけられるようなものだつた。

リカさんは泣ける映画が好きなのね……と考へていると、リカが不意に振り返った。

「すみません。私のほうが借りる本数が多いんだから……」

美音さんを先にしてもらえばよかつた——おそらく、リカはそんな詫びを口にするつもりだつたのだろう。だが、振り向いたとたん、美音の視線がどこに向かっているかに気付いたらしい。リカの言葉が途切れる。咄嗟<sup>とっさ</sup>に美音は謝つた。

「ごめんなさい。感じ悪いわよね……」

「いえ……」

そう言うとリカはカウンターに向き直り、手続きが終わつたDVDを受け取つた。そのまま店を出るかと思つたら、少し離れたところで立つてゐる。

美音は気まずい思いを少々もてあまし、いつそ先に帰つてくれないかなと思つたが、彼女はやはり動かない。どうやら美音を待つてゐるらしい。

確かにこんな時間だ、ふたりで帰つたほうが安心には違ひない。ということで貸し出し手続きを終えた美音は、リカのところに向かつた。

やつぱり気まずいな、と思いながら歩いていくと、リカは美音以上に緊張の面持ちをしていた。

「あの……美音さん」

声になんだか必死な様子が窺<sup>うかが</sup>える。リカが借りた映画のタイトルを見ていたことについて文句を

言われるわけではないらしい、とほつとしているが、リカはためらいがちに、少し時間をいただけないか、と訊いてきた。

時間が時間だし、早く帰りたい気持ちはある。だが、こんなに思い詰めたような顔のリカを捨て置くことなどできなかつた。

「じゃあ、帰りながら話をしましようか」

リカは時計を確かめ、こつくりと頷いた。

「あ、でも私、自転車で……」

「私もよ」

自転車で走りながら会話をするのは難しい、ということで、ふたりは自転車を引いて帰ることにした。だが、リカはなかなか口を開こうとしない。いつまでも自転車を引っ張つて歩くのもなんだし、美音はこちらから水を向けてみることにした。

「それでリカさん、何か私に訊きたいことでも？」

「あの……お義母さん、私のことなどにか言つてしまませんでしたか？」

「え、タマヨさん？」

タマヨというのはヨシノリの妻だ。ヨシノリ夫婦とユキヒロ夫婦は、『加藤精肉店』の二階と三階に住んでいる。

タマヨは、美音が買い物に行つたり、注文の電話をしたりすると、気軽におしゃべりしてくれるが、リカについて話しているのを聞いた覚えはなかった。

「特に何も……。リカさん、何か気になることでもあるの？」

「あの……私、気が利かないし、やっぱりお店の仕事に向いていないみたいで……」

失敗ばかりなんです……とリカは消え入りそうな声で言う。  
「お義母さんやユキヒロさんみたいに元気に挨拶もできないし、お客さんの注文も一度で聞き取れなくて訊き返したり、間違えてばかり。お肉を量るのも下手で、なかなかお客さんのおつしやる量にできないんです。もう三ヶ月も経つのに、お義母さんたちに迷惑をかけるのが申し訳なくて……」

「もう三ヶ月つて……。どっちかっていうと、まだ三ヶ月、だと思うけど……」

リカは結婚するまで、事務機器メーカーで事務員をしていたそうだ。学生時代のアルバイトまで含めても、接客業に就いたことはないという。それなのに下町の肉屋に嫁いできて、夫の親と同居までして頑張っている。しかも、まだ三ヶ月しか経っていないのだ。

『加藤精肉店』に入つて三十年にもなるタマヨや、肉屋で生まれ育つたユキヒロと同じようにできるわけがない。

何をそんなに焦っているのだろう、と考えていると、リカがぽつりと漏らした。

「私もマリさんぐらいテキパキできれば……」

その言葉で、ようやく美音はリカを悩ませてている原因に思い当たつた。

『加藤精肉店』の隣に『豆腐の戸田』<sup>とだ</sup>という屋号の豆腐店がある。

『豆腐の戸田』にはシユンという跡取り息子がいるのだが、シユンとリカの夫ユキヒロは同じ年、しかもシユンも二ヶ月前に結婚したばかりだった。その結婚相手が、先ほどリカが名前を出した、マリという女性である。

美音から見ても、マリは、客商売をするために生まれてきたのではないかと思うような人だ。豆腐屋の仕事にもあつといふ間に馴染み<sup>なじみ</sup>、親夫婦との関係も良好。豆腐屋の女将<sup>おかみ</sup>ショウコはいつも嫁自慢をしている。

マリ自身は、人に嫌な思いをさせるような人ではない。リカを悩ませているのは、ショウコの自慢話ではないか、と美音は推測した。なぜなら、美音もまた、ショウコの自慢話を耳にしたことがあつたからだ。それは、例によつて昼下がり、翌日の朝食に使おうと『戸田の豆腐』に油揚げを買ひに行つたときのことだつた。

『うちの嫁はすごくできた人だ。商売にもそつがないし、家事だつてうまい。本当にいい人に来てもらつた』

ショウコは得意げにそんなことを言つたあと、『加藤精肉店』のほうを見て嗤つた。『笑つた』で

はなく『嗤つた』のだ。

『あんなに不器用なお嫁さんじゃなくてよかつた。加藤さんとこは大変だね』  
正直、美音はうんざりした。

そもそもショウコという人は口が悪い。『悪い』というよりも『汚い』と表現したくなるほどで、近隣の評判も思わしくない。

確かにこの町の住民は、総じてはつきりものを言う傾向がある。だが、そこには相手を思いやる気持ちが窺えるし、真に相手を傷つけるようなことは言わない。だからこそ、言われた相手も、あーあ、言われちゃった、などと笑って済ますことができた。だが、ショウコはそんな町の人たちとは全然違う。なんでもかんでも比較して、少しでも自分が優位に立とうと躍起になるのだ。

馨は、ああいうのをマウンティングっていうんだよ、とさも嫌そうな顔で言うし、町の人たちも、実力のない奴ほどそういうことをやりたがる、と憤慨することしきり……

ショウコの舌禍事件については枚挙にいとまがないが、とにかく彼女は、善人揃いのこの町内においてかなり特異な存在だった。

そういうこともあり、リカを貶し始めたショウコに、最初は町内の人たちも、またか……と呆れただけだった。

ところが、ひとしきり貶せば気が済んで、矛先も変わるだろうと思つていたのに、今回はいつこうにやむ気配がない。見るに見かねた人々が、日々に注意しても本人は欠片も反省しなかつた。『ほんとに大変なことを大変だと言つてるだけじゃないか。これでもあたしは心配してるんだよ。うちのマリに、客商売や家事のコツを教えさせたいぐらいだ。マリは隣の嫁さんより若いのに、なんでも上手にできる。見上げたもんだと思わないかい?』

などと、言い返すらしい。その上、リカに面と向かつて言つたそうだ。

『あんたも商売をしてる家に嫁に来たなら、もうちよつとやりようがあるだろ。いつまでもOL気分ですかしてないで、うちのマリを見習つたらどうだい』

リカは、そうやってちくりちくりと言われても、反論することもなく控えめな笑顔を崩さない。おそらく、内心にはこみ上げるものがあつただろう。それでも、相手は長年のお隣さんだし、ましてや嫁に来たばかりの身である。反論すればさらに問題は大きくなる、とでも考えて我慢していたのかもしれない。

それが、ここにきてどうどう耐えられなくなつて……というのが、リカの現状ではないか、と美音は思ったのだ。  
とはいへ、確証などない。推測はあくまでも推測ということで、美音は单刀直入に訊いてみるとした。

「もしかして、ショウコさんのことで悩んでるの？」

「……やつぱり、わかっちゃいますか。これでも、家の中では頑張って隠してたんですけど」

リカは、ふう……とため息をついた。

結婚してから三ヶ月、毎日一生懸命やつていてるつもりだが、ちつとも上達しない。夜になると落ち込みはさらにひどくなり、くよくよと考えて眠れない。やむなく家族が寝静まつたのを見計らつては抜け出し、DVDを借りに来ていたそうだ。

「うつかり物陰とかで泣いてたら、ユキヒロさんやお義父さん、お義母さんに心配をかけちゃうでしょ？」 映画を観ていれば平気かなと思つて……

「それあんなに悲しい映画ばかりを……」

自営業の親夫婦と同居し、自分もその仕事を手伝つているとあっては、ひとりきりになれる場所も時間もほとんどない。

昼夜下がりにひとりで店番をすることはあるが、店で泣くのは論外だ。そんなところを見られたら、また隣の女将さんに咎められる。だからこそ、映画を観ながら泣いていたのだ、とリカは語つた。それなら、感動して泣いているのだろうと思つてもらえると……

泣くことにすら、そこまで気を遣わねばならないリカがあまりにも哀れで、美音は言葉を失う。DVDを次々再生し、映画を観ているふうで、その実、どんな台詞セリフも頭に入つていない。泣いて

もおかしくない内容に紛れて、自分の至らなさに涙するリカ。痛ましいとしか言いようがなかつた。「なんてこと……。それって、ユキヒロさんは知つているの？」

つい非難めいた口調になるのを止められなかつた。ショウコはさておき、自分の妻がこんなに辛い思いをしているのに、夫は何をしているのだ、と腹が立つてくる。

「知らないと思います。自分で言うのもなんですが、そういう意味では私、本当に頑張ってるんですよ。だからユキヒロさんは、私が泣いてるのは映画のせいだつて思い込んでるはずです。『お前は本当に泣ける映画が好きだなあ、俺はもっと楽しくて笑えるのが好きだけどな』って言われますから」

リカは、ちょっと得意そうな顔になつた。だが、その顔を見た美音は、さらにもどかしさを感じてしまう。

美音とリカは、月に何度か店先で言葉を交わすだけの関係だ。その美音に告げられることを、なぜ夫であるユキヒロに言えないのか……

だが次の瞬間、それこそがリカなのだと直す。

この状況は自分のせいだと思い込み、自分を悩ませていてる相手に改善を求めるなど考えもない。それどころか、自分のことで夫に迷惑をかけるなんて論外とでも思つてているのだろう。

それでいて、舅ヨウ、姑カズが自分をどう思つているかは気になる。だからこそ、美音に声をかけてき

たのだろう。けれど、そこに、美音に状況をなんとかしてもらいたいなんて気持ちは微塵もないのだ。

何をしてほしいわけじゃない。話を聞いてくれただけで十分——

そんな思いが、リカの表情から滲み出していた。

きつとりカは、今夜も映画を観て泣くつもりに違いない。涙を流すことはストレス発散のひとつ

の方法だといわれているし、今のリカにはそれ以外に方法はない。

「やつぱり、ユキヒロさんに言うべきだと思うけど……」

リカの性格を考えたら、無理な話だとわかつていても、美音にはそんなことしか言えなかつた。そんな美音の言葉に、リカは弱々しく笑う。

「ユキヒロさんには言えません。言つたら、きっとすごく怒りますから……」

「え？ リカさんが怒られちゃうつてこと？」

「じやなくて！」

咄嗟にリカの声が大きくなつた。そんな人じやないの、と必死でユキヒロを庇おうとするリカに、この夫婦の根本的な信頼関係が窺える。

リカは心底ユキヒロが好きで信頼しきつているからこそ、慣れない客商売、しかも同居という環境に飛び込んでこられたのだろう。にもかかわらずこの状況だ。美音には痛ましいとしか思えなかつた。それなのに、リカはどこか嬉しそうに言う。

「ユキヒロさんつて、ああ見えて怒つたらすごいんです。私をすごく大切にしてくれますから、私がお隣の女将おかみさんにひどいことを言われてるって知つたら、お隣に怒鳴り込んじやいます」

リカの表情はひどく柔らかい。おそらくユキヒロの顔を思い浮かべたせいだろう。

美音は、夫のことを考えただけでこんな顔になるなんて、とほほえましく思う。

ただ、美音の知つているユキヒロは、隣に怒鳴り込むようなタイプではない。元気はいいが、物の道理をわきまえているし、文句を言いたくなるようなことがあつたとしても冷静に対処するだろう。

それに、『加藤精肉店』にはヨシノリ夫婦という、ユキヒロ以上に頼りになる人がいる。何かあれば彼らが適切に対応してくれるに違いない。

ただそれは、彼らがリカの味方だった場合である。万が一、ヨシノリ夫婦がリカに不満を持つていた場合、リカはさらに困つた立場に追い込まれてしまう。

おそらくリカもそれを気にしているのだろう。だからこそ、わざわざ美音を呼び止めて、彼らが何か言つていなかつたか、と訊ねたに違いない。美音自身は、ヨシノリ夫婦からリカの愚痴など聞いたことはなかつたが。

リカの杞憂きゆだとは思いつつも、美音は改めて訊ねてみた。

「ねえ、リカさん。ユキヒロさんはともかく、ヨシノリさんやタマヨさんに叱られたりするの？」

叱られるまではいかないにしても、口調がきつかつたり……」

「どんでもないです。お義母さんはすごく優しくしてくださいます。自分がお嫁に来たときも慣れなくて大変だったそうで、ゆっくりでいいよ、辛かつたら無理しなくていいよ、つていつも言つてくださるんです。お義父さんも同じで、今時同居してくれるだけでもありがたい、ましてや肉屋の仕事まで手伝つてくれるなんて、つて……」

「だったらどうして私に、あんなこと訊いたの？」

今の話を聞く限り、ヨシノリ夫婦が自分を悪く思つてないことはわかつてゐるようだ。それなのになぜ……と、疑問を呈する美音に、リカは申し訳なさそうに言つた。

「私も最初は素直に喜んでたんです。いいおうちに来てよかつたなあ……つて。でも、隣の女将さんにはひどいことを言われ続けているうちに、もしかしたらお義父さんたちも同じように考えているんじやないかって……。でも、お義父さんもお義母さんも常識をわきまえた人だし、無理して私は優しくしてくださつてるんじゃないかつて……」

そう語るリカに、ユキヒロの話をしていたときの嬉しそうな表情は欠片もない。美音のいたたまれない気持ちも、また戻つてくる。

「疑心暗鬼になつちやつたのね」

「ええ……。もしかしたら、美音さんには本音を話してゐるかもしれないと思つて」

「私が、ヨシノリさんからリカさんについての話を聞いたのは一度だけよ。それはね……」  
そこでリカは、えつ！ と声を上げた。

「やつぱり、何かおつしやつてたんですね！ それつて、それつて……」

リカは、気の毒なほど動転している。慌てて美音は、話の先を急いだ。

「落ち着いて、リカさん！ 私が聞いたのは、リカさんがユキヒロさんと結婚する前の話なの。『本当に控えめで感じのいい子だ』『ユキにはもつたいない』つて、そりやあもう手放しで褒めてたわ。リカさんの性格もちゃんとわかつて、どうしても商売に馴染めないようなら、店には出なくていい、なんてことも……」

ヨシノリは、リカが肉屋の仕事に馴染めないかもしれないということぐらいわかつてゐた。  
その上で、まだ結婚もしないうちから少しでも仕事を覚えようと頑張るリカの姿に、感動すらしていたのだ。おそらくそれは、タマヨも同じ。ふたりは表裏のない人たちだし、本心を隠してどうのこうの、というのは考えられなかつた。

「そうですか……じゃあ私、やつぱりもつと頑張らなきや……」

新しい家族はしつかりと自分を受け入れて、支えようとしてくれている。それなら自分は頑張るしかない。こんなことで負けちゃいけない……

リカの決意宣言のような台詞を聞いて、美音は少し悲しい気持ちになつてしまつた。

リカは、家族の信頼に応え、自分の役割を果たすことに必死になつてゐるよう思える。彼女の頭の中には、家族なんだから甘えたつていい、支え合つて当然、という考えがないのだ。

辛いときは甘える、できないときは助けてもらう。それが家族というものだ、と言う人は多いし、美音もそのとおりだと思う。

ただ、リカの場合、家族になつてまだ三ヶ月。傷ついた自分、弱い自分をさらけ出し助けを求めるには、短すぎる時間なのかもしれない。

リカは黙つて自転車を押している。美音はリカに、家族には甘えてもいいのだと気付いてほしかつた。

「ユキヒロさんがそうしたいなら、お隣に怒鳴り込んでもらつてもいいんじやないかしら……」

要は、美音との関係に横やりを入れられたとき、兄の怜や祖父の松雄のところに直談判に行つた。自分のせいで対立を生んだことは申し訳ないと思う反面、美音は彼が自分を想つてくれる気持ちがとても嬉しかつたし、それ以後、彼の家族から文句を言わされることもなくなつた。

リカの場合にしても、ユキヒロが行動を起こせば、案外事態はいいほうに向かうのではないか、と美音は考えていた。

「でもお隣の女将さんはすぐくはつきりした方ですから……」

「そうねえ……」

はつきりしているというのは褒め言葉のようだけれど、往々にして——特にショウコの場合ばかりの否定的表現だ。

言わなくてもいいことはつきり言つて、人を傷つける。しかも自ら『悪気はない』とか『あんたのためを思つて』なんて言葉を添える。自分は決して間違つていないと信じるやつかいなタイプである。その上、もつと悪いことにショウコは、強い相手には簡単にしつぽを巻く。自分より弱そな相手を捕まえてはもつともらしく『助言』をするのだ。

これまで、見るに見かねた人が、弱いものいじめはやめろと諭したことがあつた。ところが本人は、心配しているからこそその助言だ、そんなふうに取るなんて、それこそいじめじゃないか、なんて食つてかかつたのだ。  
のれん 暖簾に腕押し、蛙の面になんとやら……そんな相手に怒鳴り込んだところで、事態が解決するとは思えない、とリカは言いたいに違いない。

「前に勤めていた会社にも、ああいうタイプの人人がいました。きっと、言つても無駄だと思います」「でも、なにも言わなければ、これからもずっと我慢することになっちゃうわ。リカさん、それでいいの？」

「実際に、ちゃんとできてないんですから、言われても仕方ありません。私が失敗さえしなければいいだけのことなので……」

なぜこんなに失敗ばかりしてしまったのか。学生時代も、会社に勤めてからも、こんなに失敗を繰り返したことなどなかったのに、と、リカは今にも泣きそうな顔になる。

その言葉を聞いて美音ははつとした。リカは客あしらうに不慣れだけでなく、失敗することにも慣れていないのではないだろうか。

「リカさん、もしかして昔からずっと優等生だったんじゃない?」

「え?」

学校も仕事もそつなくこなしてきた。事務仕事はある意味、勉強の延長のようなもの、新入社員向けの教育もしつかり施されたし、慣れるのにそれほど時間はかからなかつた。

けれど、肉屋の仕事はこれまでとはまつたく趣が異なる。おもしろい 義父母や夫は忙しい合間を縫つてあれこれ教えてくれるけれど、人見知りの激しいリカにとつて、毎日毎日店に立つだけでも大変だつた。新しい家族に迷惑をかけたくない、なんとか上手くやらなければと緊張するあまり、失敗を繰り返してしまう。失敗するたびに、夫や義父母に申し訳なくて自分を責めまくる。実際は、文句ひとつ言われたことはないというのに――

失敗経験の少ないリカにとつて、失敗すること自体がストレスなのではないか。そしてそのストレスが、また新たな失敗を呼んでしまう、という悪循環に陥つているような気がした。

「ヨシノリさんやタマヨさんに叱られたことはないって言つてたけど、それって、リカさんに気を

遣つてるんじやなくて、叱るほどのことでもないつて思つてはいるだけじゃないかしら?  
「そうでしようか……」

リカはなお不安そうにしている。美音はさらに話を続けた。

「お嫁さんは『加藤精肉店』の新入社員みたいなものでしょ? 失敗するのは当たり前じゃない。注文を聞き間違えたら、ごめんなさいって謝つてもう一回聞けばいいし、お肉を量るのだってゆつくりでいいのよ。それ以外の失敗をしても、お肉屋さんに壊れて困るようなものなんて、そんなにないはずだし大丈夫よ」

秤はかりはそう簡単に壊れないし、レジが動かなくなつても誰かがなんとかしてくれるだろう。この界かい隈わいには、ピーピー鳴つているレジの前で慌てるリカを見て笑い出す客はいても、怒り出すような客はない。お肉を量るのが遅いといつてもせいぜい数分、それが待ちきれないほどせつかちな客なら、量り売りではなく、パック詰めを売つてはいるスーパーに行くだろう。

「今までに、お客様から苦情をいただいたことはある?」

もちろんショウコさん以外よ、と付け足した美音に、リカははつとしたような顔になつた。

「そういえば、ありません」

「みんな、ちゃんと待つてくれたでしよう?」「いい。慌てなくていいよ、ゆつくりでいいよ、どうせ暇なんだから……つて」

「やっぱり……。私たちが『ぼつたくり』を引き継いだときもそうだったわ。いろいろ失敗したのに、みんな笑って『いいよ、いいよ』って……。この町はそういう町なのよ。一生懸命な人には優しいの。きっと、自分が慣れなくて大変だったときの気持ちを忘れてないんでしょうね」

「そうですね」

「叱られるかもって思うと緊張しちゃうわよね。でも、安心して。そんなことで叱られたりしないから。今のリカさんは、自分で自分の頭の中に怖い人を作ってる。きっと、周りの人みんながショウコさんに見えちゃってるのね」

実際は誰も叱ったりしない。ショウコはうるさいかもしれないが、彼女の場合は相手が誰であつても同じ。たとえ完璧に仕事をこなしていても、理由を見つけて文句を言うだろう。

「あの人は例外中の例外。このあたりに、あんなに難しい人はショウコさんしかいないわ。リカさんが誰からも叱られてないってことは、みんなは、リカさんが一生懸命だつてわかつてくれるつことでしょう？ だからきっと、それでいいのよ」

リカの気持ちを少しでも軽くしたくて、美音はついつい多弁になる。そんな美音の言葉を、リカはただじつと聞いていた。

「面と向かって文句や嫌みを言われるのは辛いでしようけど、なるべく気にしないようにね。おかしいのはショウコさんのほうなんだから、全自动悪口製造機が置いてあるとでも思つて、頑張つて

### 聞き流して」

『全自动悪口製造機』という言葉に、リカは少しだけ笑つた。でもその笑みは、単に言葉が面白かったから浮かんだだけで、心が軽くなつたわけではなさそうだ。

美音は、もっとこの人を楽にしてあげられる言葉をかけられればいいのに……と自分が歯痒くなる。

けれどちようどそこで、曲がり角に着いてしまつた。美音の家は右に曲がった先、リカは左……ここで別れざるを得ない。時間も遅いし、これ以上話し続けることはできなかつた。

リカが、深々とお辞儀をして言う。

「話を聞いてくださつてありがとうございました」

「聞くだけしかできなくて、ごめんなさい。でも、やっぱりユキヒロさんにだけは話したほうがいいと思うわ。リカさんは心配をかけたくないのかもしれないけど、ユキヒロさんにしてみたら、旦那さんなのに悩みを打ち明けてもらえないのは寂しいかも。リカさんだつて、悩みがあるのにユキヒロさんが相談してくれなかつたら寂しいと思わない？」

「そうですね……。私にぐらい言つてくれても……って思います」

「でしょ？ あんまり重く取られたくないなら、せめて、今日、こんなこと言われちゃつたー、ぐらいの感じで」

「……やつてみます」

そしてリカは自転車に跨<sup>また</sup>がり、商店街に続く道を走つていった。

深夜にリカと出会つてから三日後の夕方、『ぼつたくり』のカウンターにはシンゾウとウメが座っていた。

ふたりは揃つて本日のおすすめであるマグロとゴボウのしぐれ煮を注文し、盃を傾けていた。

マグロとゴボウのしぐれ煮は、マグロとゴボウを酒と醤油、みりんで煮込む料理だが、美音は日によつて食材の切り方を変えている。脂<sup>あぶら</sup>がのつているマグロは身が崩れやすいため、ゴボウもささがきにして柔らかく仕上げる。反対に、身が締まりやすい赤身のマグロは角切りにし、ゴボウも大きさを揃えて乱切り、さつと煮て歯ごたえを残すようにしているのだ。

今日は赤身のマグロを使つたため、ゴボウは乱切り。ふたりはしゃきしゃきの歯ごたえを楽しみつつ、『この年でもゴボウがちゃんと噛めるのは、日頃の手入れの成果だ』などと、自画自賛し合つていた。

ちなみにシンゾウは『ぼつたくり』と同じ商店街で薬局を営んでおり、町内のご意見番と呼ばれていた。

る知恵者、ウメはかつて芸者をしていたらしいが今は隠居していく、三日に一度現れてはお気に入りの焼酎<sup>しゃちゅう</sup>の梅割りを注文する。いずれも『ぼつたくり』の常連である。

「そういや、肉屋<sup>せがれ</sup>の<sup>の</sup>婆<sup>ばば</sup>が、豆腐屋<sup>ばばや</sup>の婆<sup>ばば</sup>に、ぶち切れたらしいぞ」

シンゾウの、困つたものだと言わんばかりのため息に、ウメがちよつと目を見張る。

「ユキちゃんが？ 珍しいこともあるもんだね。いつたいなんで？」

「それがさあ……豆腐屋の婆が肉屋の若嫁さんをちよいちよいじめてたらしくて、『俺の嫁に余計なこと聞かせるんじゃない！』って……」

「ひやあ……そりゃあ、相当腹<sup>ちゅう</sup>に据えかねたんだろうね」

よほど驚いたのだろう。ウメは酎ハイの中の梅をつついでいた箸を止め、口をあんぐり開けた。

「だよなあ……。なんせ、ユキは昔<sup>も</sup>から喧嘩が嫌いで、よそで誰かに意地悪されてもじつと我慢。家に帰つてから押し入れに潜り込んで泣くような奴だった」

「あたしもタマヨさんから聞いたことがあるよ。ユキちゃんが泣いてるのに気付いて、どうしたんだつて訊いても、なんでもないつてごしごし涙拭いたりするんだつて。で、翌日には元気になつてはしゃぎ回つたりして……本当に辛抱強い子だよ」

世の中には悪口を言うのが大好きという人間がいる。ユキヒロはそれとは正反対の性格で、とにかく誰かを悪く言うのが嫌いだ。たとえそれが根拠のあることであつても、である。なんでも黙つ

て堪えてしまうから争いごとにはならない。ましてや、自分が争いの種を蒔くなんでもつての外。  
別に弱虫というわけではないが、ユキヒロは『温厚』を『我慢』でコーティングしたような人物だった。

さらにその性格は、父親のヨシノリもそつくり同じだ。

商店街の人々は、売られた喧嘩を片つ端から買つて、肉包<sup>丁</sup>でも振り回された日には物騒で仕方がない、肉屋はあれぐらいでちようどいいんだ、と笑っている。血気盛んな魚屋であるミチヤは、そいつは俺に対する皮肉か? なんてくつてかかつたとかかからなかつたとか……

いずれにしても、『争わない』が代名詞みたいなユキヒロが、あの毒舌家のショウコ相手に一幕演じたと聞けば、誰もが驚かずにはいられない。例外があるとしたら、あらかじめリカから話を聞いていた美音ぐらいのものだろう。

肉屋と豆腐屋の悶着<sup>もんぢゃく</sup>、しかも怒鳴り込んだのが息子のユキヒロときたら、この話はリカの悩みに直結しているに違いない。ユキヒロに伝えたほうがいいと言つたのは自分だ。それが原因で状況がこじれたとしたら、申し訳なさすぎる。美音は肝を冷やしつつ話の続きを待つた。

「俺も耳を疑つたけど、どうやら本当らしい。なんでもあの婆<sup>ばばあ</sup>、若嫁さんが嫁に来てからずつと、ちくりちくりいびつてたんだってさ。しかも、若嫁さんがひとりのときに限つて」

「まったくあの因業婆<sup>いんじゅうば</sup>! 自分どこにも若い嫁がいるんだから、いびりたけりやそつちでやればいい。なんでよそ様にまで手を出すのかね!」

「ウメ婆、それはそれでちよいと差し障るぜ」

「どこの嫁であろうと、いや、嫁でなくとも誰かをいびるなんてやつていいことじやない、ヒシンゾウは顔をしかめた。ウメはあつさり前言を撤回する。

「そりやそうだ。あたしも気をつけるよ。それで?」

「ま、ウメ婆がそんなことしないのはわかってるけどな。で、若嫁さんは長いこと辛抱してたらしくんだが、どうとう堪え切れなくなつてユキにこぼしたそうだ。あ、こぼしたつていつても『隣のおかみお嬢さん<sup>おかみおいらさん</sup>がいろいろ教えてくださるんだけど、なかなかうまくできなくて、どうしたらいいかしら……』つてな感じだつたみたいだが」

話を聞いた美音は、それはいいアプローチだ、と感心してしまった。

ただの泣き言ではなく、困りごとの相談、しかもショウコをどうにかしてほしいというのではなく、自分自身を変えることで問題を解決したいと訴えている。おそらくリカは散々迷つた末、このやり方ならもめ事の原因にならないと考えたのだろう。

「なるほど、肉屋の若嫁さん、けつこう頭が切れるんだね」  
ウメは美音と同じことを思ったのかしきりに頷いている。その間に、シンゾウは酒が注<sup>つ</sup>がれたグラスに口をつけた。

「お、美音坊<sup>ぼう</sup>、こいつあ……」

「あんたが酒の話をすると長くなる。怒鳴り込まれた豆腐屋の婆はそのあとどうしたんだい？」  
「シンゾウさん、お酒の説明はあとでちゃんとします。だから、とりあえず続きを聞かせて！」

ウメと美音にせがまれて、シンゾウはやれやれといったふうに肩をすくめた。いつたいいつから美音坊はそんな噂好きになつたんだい……と嘆かれ、少々恥ずかしく思ったものの、リカ、そしてユキヒロのその後が気になる。ショウコのことだから、こてんぱんにやりこめたのでは？ と心配になつたし、同じように考えたのか、ウメの眉間に深い皺が寄つていた。

ところが、ふたりの意に反して、シンゾウはやけに嬉しそうに答える。

「それがさ、驚いたことに、ユキの圧勝」

「え!?」

「もうさ、生まれてから今まで溜め込んでた罵り文句を全部出し切つたんじやないかってぐらい。怒濤のごとくおつかぶせて、最後に『今度うちのリカに余計なこと言つたら、豆腐の桶に豚の内臓ぶちこむぞ！』って」

「うわーすごい」

触らぬ神に祟りなし、と今まで誰もがショウコを放置していた。確かに苦言を呈する者はいたが、本気で立ち向かつた人はいなかつたはずだ。その彼女に直談判しただけでもすごいのに、最後の台詞が想像させる情景がまたすごい。

豆腐がゆらりと浮いている水桶に豚の……と思つただけで氣分が悪くなる。

「婆は悪いに違ひないが、店の豆腐に罪はねえ。それは勘弁してくれ、つて見てた連中が止めたらしいけどなあ」

それはそれでなんだかお門違いな仲裁だね、とウメは呆れる。

いずれにしても、ショウコは怒り狂うユキヒロ相手に一言も返せなかつたそつだから、ユキヒロの氣も済んだことだろう。シンゾウはしきりにリカを褒める。

「しつかし、大したものだよ、あの若嫁さんは」

「うん、見かけによらない」

ウメはどこか嬉しそうに笑つて言う。あのユキちゃんにそこまでさせるなんてよつぱり惚れられてるんだねえ……と。

馨は馨で、ラブラブ熱愛だと大喜びしている。

「そのうち、カナコさんを超えるかもね」

夫婦円満でけつこうなことだ。でも、大したものだつていうのは、それだけじやねえ。ユキが怒鳴り込んだあと、若嫁さんは菓子折持つて謝りに行つたそつだ。お騒がせして申し訳ありませんでした、つて

「えー!? だつて、どう考えたつて、悪いのはあつちじやん」

さっきまでにやにやしていた馨が、にわかに怒り出した。ショウコが詫びを入れるならまだしも、その逆なんて考えられない、と大騒ぎである。

「若嫁さん曰く、どんな理由があつてもお客様の前で騒ぎを起こしたことには変わりはない、自分が余計なことを言つたせいで、つてさ」

「ああ……」

そこで美音は、あの夜のリカの様子を思い出した。彼女がしきりに、ユキヒロさんには言えない、と首を横に振っていたのは、こういうことだったのかもしれない。

「まあ、結果はそんな感じだが、そもそも今回の発端もあの婆さんのいびりだつたらしい」シンゾウは、居合わせた客から聞いたという事の顛末てんまつを話し始めた。

なんでもショウコはリカがひとりで店番をしていたときに現れ、ここぞとばかりに嫌みや文句を連ねたらしい。挙げ句の果ては、あんたは本当に役に立たない、あんなに慌てて結婚したのはこの機会を逃したら嫁のもらい手がなくなりそうだつたからに違いない、とまで……

おそらくショウコは、自分の息子のほうがずっと前から結婚の予定を立てていたのに、ユキヒロたちのほうが先に結婚してしまったことが気に障つてならないのだろう、というのがシンゾウの推測だつた。

「なんだいそりや……。そんなのどっちが先だつてかまやしないじやないか」

呆れ果てたようなウメの台詞せりふに、馨もしきりに頷く。

「そうだよ。あとから結婚したから町の人たちに受け入れてもらえなかつた、とでもいうならまだしも、みんなして大歓迎、大喜びだつたのに！」

「まあ、あれだ。昔つからあの婆さんはユキのことをライバル視してたからな。ヨシノリ夫婦はそんなこと気にもしちゃいねえし、息子同士も仲良くやつてるのに」

「まつたく迷惑な話だよ……それで？」

「言いたいだけ言つて婆さんが意氣揚々と引き上げてつた直後に、ユキが配達から帰つてきたんだとさ。若嫁さん、ユキの顔を見るなり涙をぽろぼろ一いつて……かわいそうによう……」

ちよほどその前日の夜、ユキヒロはリカから「隣の女将おかもさんがいろいろ教えてくださるんだけど……」と相談を受けていた。ヨシノリ夫婦にも話したうえで、今夜にでもヨシノリが隣に話をしに行く予定にしていたらしい。ユキヒロは当初、自分の妻のことだから、と自分で話しに行くつもりだつたようだが、隣との関係を荒立てないためにも俺に任せろ、とヨシノリに言われ、下駄を預けることにしたようだ。ところが、リカの涙を見たとたんに頭に血が上り、そのまま豆腐屋に突撃してしまつたのだという。

「かつこいいなあ……さすがユキちゃん！」

馨は手を叩かんばかりに喜んでいる。小さい頃からかわいがつてもらつていたこともあつて、馨

はユキヒロの大ファンなのだ。

「いい男に仕上がつたもんだ。ま、てなわけで、ユキは怒鳴り込んじまつた。若嫁さんは豆腐屋の婆の性格だつてわかつてゐるし、それが原因で難癖つけられたら商売に障ると思つたんだろうな。原因は自分にあるんだから自分が謝りに行くつて、上等な饅頭持つて隣へお出かけだ」

ウメは、そこまで気配りのできる嫁さんに、よくも難癖つけられたもんだ、と呆れまくつている。

だが、シンゾウはにやりと笑つて言う。

「でもな、考えてみりや、それで痛手を食らつたのはあの婆さんのほうだぜ」

シンゾウの言葉に、ウメは一瞬きよんとした。そしてしばらく考えたあと、ぱあつと顔を輝かせる。

「そうか。度量の違いを見せつけられたってことだね！」

「そのとおり。ま、若嫁さんをいじめてたことも含めて、あの婆さん、当分顔を上げて歩けねえぞ」「じゃあ安心。これで一件落着だね。これ以上なんかあつたら、豆腐の桶も堪らないだろうし」

「うわー、想像しただけでゾッとする！ もう桶の話はやめようよ！」

馨が悲鳴を上げ、そこで肉屋対豆腐屋の話は終了となつた。

さてさて、とばかりにシンゾウが訊いてくる。

「で、美音坊、この酒は？」

「ああ、ごめんなさい。なんだと思います……つて訊くまでもないですよね？」

「このキレと、香りは……？」

そこでシンゾウは、もう一口酒を含み、じつと考へる。だがそれはただのポーズ、シンゾウはもうとつくにこの酒の銘柄を見破つてゐるはずだ。なぜなら、この酒はこれまで何度もシンゾウに出しているし、彼のお気に入りの銘柄だからだ。

「このまろやかさと香りは、水芭蕉……うん、純米吟醸だな」

「はい、正解です」

『水芭蕉 純米吟醸』は群馬県最北部、川場村にある永井酒造が醸す酒である。尾瀬の大地に濾過された水と兵庫県で契約栽培された山田錦、そして明治十九年以来伝えられてきた技術によつて造られるこの酒は、まろやかな甘みと果物を思わせる吟醸香が持ち味である。

ただこの『水芭蕉 純米吟醸』は一年を通じて販売されており、『ばつたくり』の冷蔵庫の常連である。晚秋から冬に入つたばかりのこの季節、美音としては同じ『水芭蕉 純米吟醸』でも季節限定の『ひやおろし』をすすめたいところだつた。だが、今、冷蔵庫の中に『ひやおろし』はない。

残念な思いが顔に出たのか、シンゾウがくすりと笑つた。

『ひやおろし』を出せないのが悔しいのかい？」

「……そのとおりです。ごめんなさい」

実のところ、美音は今年『水芭蕉 純米吟醸 ひやおろし』を確保できなかつたのだ。

今年の夏以降、美音の身边はとにかく賑やかだつた。賑やかというよりも激動と言つていいほどである。

ひとりの客にすぎなかつた要との関係が深まり、それに起因して賞味期限切れの鰻を使つたことをネットでさらされるという、店の存続を左右するような事件もあつた。

その後も、常連客であるノリの介護問題、祖父にサツマイモの茎を食べさせたい少年、七五三のお祝いに悩むマサの孫娘の話……と心配事が相次いだ。中でも大きかつたのは、要のプロポーズから始まつた一連の騒動だ。あれはほとんど要の母である八重<sup>やえ</sup>が引き起こしたようなものだつたが、原因が美音の告げ口にあることは間違いない。要には本当に気の毒なことをしてしまつたと、反省することしきりだつた。

とにかく、そんなこんなで美音は心身ともに忙しく、気が付いたときにはすっかり秋が深まつていた。慌てて秋の酒をチェックし、発注しようとしたものの『水芭蕉 純米吟醸 ひやおろし』はすでに売り切れ、美音は入手することができなかつたのだ。

『ひやおろし』は、冬に搾つた酒を春先に火入れし、涼しい蔵で夏を越させたあと出荷される秋限定のものである。一説には、蔵の温度と外気温が同じになるころに出荷されるとも言われているが、その出荷時期については蔵元に委ねられ、ボージョレヌーボーのように厳密な決まりがあるわけで

はない。

もちろんそれは酒の熟成を見極め、最高の状態で出したいたからこそなのだが、仕入れる側にどうでは少々辛い。常に情報に気を配り、注文しなければならないのだ。

特に、『水芭蕉 純米吟醸 ひやおろし』は人気が高い酒で、あつという間に品切れになる。だからこそ毎年発売情報をこまめにチェックし、買いそびれないようにしているのに、今年はそれができなかつた。それもこれも、すべて美音自身のせいだつた。

「ごめんなさい。『水芭蕉』のひやおろし、来年は必ず入れるようにしますね」  
「気にしなさんな。『水芭蕉』はひやおろしじゃなくても十分美味いし、秋は今年で終わりつわけじやねえ。来年を楽しみに待たせてもらうよ」

「ありがとうございます」

シンゾウの言葉にほつとして、美音は深く頭を下げた。

「つてことで、酒のおかわりとなんかつまみをもらおうかな」

すかさず馨が『水芭蕉 純米吟醸』の瓶を取り出し、シンゾウのグラスに注ぎながら言う。

「シンゾウさん、今日のおすすめは、秋鮭のちゃんちゃん焼きでーす！」

「おー!! いいねえ、味噌をたっぷりのせてくれよ」

「あたしも同じのをもらおうかね」

「了解！ 鮭のちゃんちゃん焼きふたつ！」

秋鮭が出まわるころ、美音は北海道の名物料理であるちゃんちゃん焼きを作る。

本来は、鉄板の上で、鮭の半身にもやしや玉葱たまねぎ、キャベツ、ピーマンといった野菜やきのこ茸をふんだんにのせ、みりんや酒、味噌の味つけで豪快に焼き上げる料理であるが、『ぼつたくり』に大きな鉄板を持ち込むわけにもいかないため、大ぶりのホイル焼きに仕立てることにしている。

それでも、大きな切り身をふたつ使い、たっぷりの野菜、腹持ちのいいジャガイモまでのせてしまうちやんちゃん焼きは、ボリュームたっぷり。ウメなどはご飯はいらないと言ふぐらいだつた。

「おまちどおさまでした」

美音は焼き上がったちゃんちゃん焼きを皿に移し、カウンター越しに差し出した。

普通のホイル焼きよりもずいぶん大きいため、焼き上げるのにも時間がかかる。シンゾウもウメもそれは承知の上での注文なのだが、やはり申し訳なく思つてしまつ。

いつもの『お待たせしました』ではなく『おまちどおさまでした』と言う美音を軽く笑いながら、シンゾウとウメはホイルの折り目をそつと開いた。とたんにもわっと湯気が立ち上り、店内に味噌の香りが広がっていく。

「あーもう冬が来るんだねえ……」

湯気が疎ましくなくなつたら秋。それを通り越して恋しくなつたらもう冬は近い——

ウメは毎年、ちゃんちゃん焼きのホイルを開けるたびにそんなことを言う。

野菜から出た水分でちょうどよく緩められた味噌を鮭に絡め、酒と交互に口に運びながらシンゾウが呻く。

「うめえなあ……。寒くなるのは困りもんだが、やつぱり冬は旨いもんが多い」

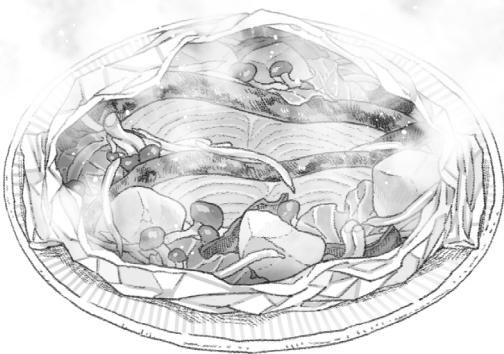
「あら、夏ならではの美味しいものもたくさんありますよ？」

「まあな。とはいって、燴酒かんざけはやつぱり冬だよ」

「シンさん、冷酒呑んでるのに、なにを言つてるんだか……。その点、梅割り一辺倒のあたしは夏でも冬でもござれ。ほんと、梅割りはなんにでも合うからいい」

ウメがご量員ひいきの燴酒じよなうの梅割りを褒めあげる。

味噌の柔らかい香りが漂う中、静かな夜が更けていった。



その夜、要が現れたのはいつもどおり閉店間近だった。

今日のおすすめがちゃんと焼きたと知った要は、日本酒ではなくビールが呑みたいと言つた。「冷酒も捨てがたいけど、舌を焼くほど熱い料理って、やっぱり冷たいビールがほしくなるんだ。まあ、これは俺の場合で、人それぞれだろうけど」

そんな言い訳しなくてもいいのに、とおかしくなるが、これは要が『ぼつたくり』が日本酒に力を入れている居酒屋で、美音も馨もことさら熱心に学んでいると知つていてるからだろう。「ご心配なく。同じようにおつしやるお客様はたくさんいらっしゃいますよ。たぶん、餃子と同じ扱いなんじやないでしょうか？」

「あーそうそう、そういう感じ」

「でしょ？ ちようどちゃんと焼きたに合いそなビールを見つけたところなんです」

そう言いつつ、美音は冷蔵庫から一本のビールを取り出した。

小ぶりな瓶に貼られているラベルは深い青。真ん中に『COEDO』というブランド名、その下に『Ruri』と書かれている。『COEDO』は小江戸を意味し、埼玉県川越市にあるコエドブルワリーが造つ

ているクラフトビールである。

美音はこのビールに『スーパー呉竹』の店頭で出会つた。その日は日曜日で、馨にせがまれて餃子をたくさん作り、餃子ならビールがなくちゃ！ ということで、姉妹で『ショッピングプラザ下町』に出かけたのである。

家で呑むのだから手軽な国産で……と思つていた美音は、ショーケースに並んでいた目が覚めるような深い青に引かれて手に取つた。てつきり外国産のビールかと思つたら国産、しかも関東で造られている地ビールで、これは是非とも呑んでみなければ！ そのままレジに運んだのだった。期待一杯でグラスに注いでみると、ピルスナー特有のレモン色。味わいは思いの外フルーティで軽く、餃子にはぴったりだつた。これならドイツビール、しかもピルスナーを好む要の舌にも合うだろうと考えて、改めて『ぼつたくり』で仕入れたのである。

このビールには瓶と缶の両方があり、元々美音が買ったのは缶だつた。あの深い青をそのまま店に置きたいと思ったけれど、やはり居酒屋としては瓶のほうが好ましい。缶しか製造されていないならまだしも……と泣く泣く店用には瓶を仕入れたが、その後も自分用にはずっと缶を買つてゐる。美音にとつてこの『COEDO Ruri』は中身が素晴らしいだけではなく、容器まで含めてお気に入りのビールだつた。

「これ……日本のビールだよね？」

「ええ、それが何か？」

「ドイツビールみたいにクリアで、ベルギービールみたいにフルーティだ。なんかすごいよ」

「でしょう!」

美音は自分が選んだビールが要のお眼鏡に適ったのが嬉しくて、つい声を高くしてしまった。

要は目を輝かせている美音を尻目に、ビールとちゃんちゃん焼きのコラボレーションに夢中。その姿はさらに美音を喜ばせる結果となつた。

お客様が喜んでくれるのが嬉しいのは当然だけど、要が喜ぶ姿を見るのは格別だ。逆に、彼が悲しんでいる姿を見るのは辛いし、もしそんな状況になつたら自分にできることはないかと考えるはずだ。

『加藤精肉店』のユキヒロが『豆腐の戸田』に怒鳴り込んだのも、そんな気持ちからだつたのだろう。もしも要が誰かに虐げられ、辛い思いをしていると知つたら、美音だつてできる限りのことをしたいと思うはずだ。もつとも、自分がシヨウコをやり込められるとは思えなかつたけれど……

「どうしたの？ 難しい顔をして」

要の声がした。ビールとちゃんちゃん焼きで人心地ついて、ようやく口を飲食以外のことを使う気になつたのだろう。食べたいときに食べ、話したいときに話す。沈黙が邪魔にならない関係を築け正在こと満足を覚えながら、美音は『豆腐の戸田』の一件について要に話してみた。

その底には、もしも自分がリカと同じような目に遭つていたら、要がどんな反応をするのか知りたいという気持ちがあつた。

「ふーん……それはまた、大騒ぎだつたんだね。普段あんまり争いごとを好まない人が、そこまでするんだから相当腹に据えかねたんだろう」「でしようね。私から見てもりかさんはものすごく辛そうでしたから」「どこにでもそんな婆さんはいるからなあ……」

「要さん、もし私がそういう目に遭つてたらどうします？」

どう答えてほしいのか自分でもわからないまま、美音は要の答えを待つた。

「隣の意地悪婆<sup>ばばあ</sup>にいじめられてたらつてこと？」

「まあ……そうですね」

「どうしてほしい？」

「質問に質問で答えるのはずるいです」

美音の言葉に、要は困つたような、少し面白がつてているような顔で答える。

「じゃあ選択肢を出そう。三つの中から好きなのを選んで」「はい？」

## 立ち読みサンプルはここまで

「その一、突撃して罵詈雑言を浴びせかけて、ぐうの音も出ないほどやつづける」「ユキヒロさんと同じですね」

要がそれをやつたら、ユキヒロの三倍は怖いかもしれない。たぶん、鉄壁の理論構成でやり込まれるだろう。でもまあ、一番一般的的、かつ手っ取り早い対応である。

「その二、裁判所に持ち込んで、誹謗中傷で訴える」

「う、訴える？ そんなことで裁判沙汰にするんですか!?」

美音は、たかがご近所間のもめ事にそれはちよつと……と怯えてしまう。そんな美音を鼻で笑つて、要はさらにひどい選択肢を示した。

「その三、正々堂々なんてかなぐり捨てて、闇から闇へ」

要の、右手を軽く首にあてすと滑らせる仕草を見て、美音は仰天した。

「なんて物騒なこと言うんですか！ それは犯罪つてものです！」

「蛇の道は蛇つていうだろ？ 昔の仲間に頼めばそれぐらいのこと平氣で……」

「だめです！ そんなことしたら要さんが捕まっちゃいます！」

せめて笑つてくれれば冗談だとわかるのに、要の表情には一片の緩みもない。おそらく彼は本気なのだろう。さらに真面目な顔のまま付け加える。

「おれは、大事な人を傷つけられて黙つていられるほど温厚じやない。たとえ周りの目には些細な

ことに映つたとしても、君が傷ついたと感じたならそれが真実だ。おれはそれを君に感じさせた者を許さない。どうあつても報復するし、そのための手段は選ばない」

「要さん……」

「この際だから言つておくけど、君は、自分が傷つくことなんか気にもせずに、どこにでも突つ込んでいく癖があるよね。でも、おれはそれがすごく心配だし、なにかあつたらと思うといたたまれない。おれがそう思つてることを君にもちろんとわかつててほしい」

あまりにも真剣にそう言われ、美音はゴクリとつばを呑み込む。

「わ、わかりました！ わかりましたから、法律に触れるようなことはしないでくださいね！」

「本当にわかつてる？」

「わかつてます。了解です！」

だからその物騒な目の色を引っ込みで、と美音は全力で諫める。

要が自分を想つてくれる気持ちはありがたいが、いくらなんでもそれはやりすぎだ。

美音が何かに傷ついたびに、いちいちそんなことをされでは、美音の社会生活は壊滅、普通に暮らすこともできなくなる。

要という人間の本質は、自分が考えているよりも遥かに恐ろしいのではないか。そんな気がして美音は背筋が冷たくなる思いだつた。